

◎新型コロナウイルス禍で考える日本の行方

◎第 19 回 有史以来最大の歴史の転換点

全国日本語学校連合会 研究員 對馬好一

ロシアのセルゲイ・ミロノフ元上院議長が、自ら党首を務める政党「公正なロシア」のホームページに、「ロシアは北海道の権利を有している」と書き込んだことを日本のテレビ局「テレビ朝日」が4月7日に報じました。9日付『産経新聞』の1面コラム「産経抄」はこの発言に対し、「やはりそう来たかと感じる」と日露間の国境線をめぐる厳しい状況に警戒感を述べています。「産経抄」によれば、ミロノフ氏は別の場で「日本の政治家たちが、第二次世界大戦の教訓と関東軍の運命を完全に忘れていないことを願っている」とも述べています。関東軍は、戦前から満州（中国東北部）に展開していた旧日本陸軍の部隊で、大戦末期、ロシアの前身であるソビエト社会主義共和国連邦（ソ連）軍と交戦し、終戦後、その将兵と支援した民間人の多くがソ連に抑留され、極寒のシベリアなどで重労働を科せられました。ミロノフ氏はそのことを指しているのかも知れません。

終戦から34年後の1979（昭和54）年12月、ソ連軍がアフガニスタンに侵攻しました。翌年1月、当時、札幌市で新聞記者をしていた私は、「北海道は大丈夫か」というテーマで道内を一周し、日ソ国境の最前線取材しました。その過程で、サハリン（旧・樺太）を指呼の間に臨む「稚内」、北海道北部の中心都市「旭川」、北方領土の玄関口「根室」各市の一般市民たちが、異口同音に「アフガンの惨状はいつ北海道で起きるかわからない。ソ連軍が来る兆候があれば私は内地（本州の青森県以南）に逃げる。ここにいると殺される」と述べ、新聞紙面に実名を出さないことを条件に、真剣な表情で取材に応じてくれたのが忘れられません。

今回のロシア軍のウクライナ侵攻をめぐっては前回（第18回）の本欄でも指摘した通り、留学生の皆さんそれぞれの立場やお考えがあると思います。ですから、私自身や日本政府の考え方を皆さんに押し付けるつもりはありません。しかし、北海道の住民は、ソ連やその継承国のロシアと他国との紛争が起きるたびに、こうした怯えを抱えていることは事実です。その一方で、新型コロナウイルス感染拡大以前は、北方領土や国境周辺の日露双方の一般市民の友好交流も行われてきました。私自身が体験したその一端をご紹介します、将来の日露

関係に思いをはせたいと思います。

安倍晋三元首相の父君、安倍晋太郎元外相が1990（平成2）年1月、当時のソ連共産党のミハイル・ゴルバチョフ書記長と会談するためにモスクワに乗り込んだときに、政治記者だった私も同行して取材しました。会談の目的は、終戦後、ソ連が違法占拠している北方領土を日本に返還し、日ソ平和条約を締結することにあります。その時、モスクワ市内で車窓から見た商店の店先には商品はほとんどなく、^{から}空のショーケースが目立っていました。

これに先立ち、北海道警察根室署は1980（昭和55）年1月、根室市の漁船員らを関税法違反や^{けんえき}検疫法違反の疑いで逮捕しました。私が取材した同署の調べでは、漁船員らは道内の漁船の船主たちから1億円以上を集め、ソ連が北海道本島と北方領土の間に引いた「中間線」を超えて日本の漁船が安全に漁をする見返りにソ連の国境警備隊に2千万円を渡していたといいます。ソ連側に渡していたものの中には、現金のほか、道内で発行されていた『北海道新聞』『北海タイムズ』や地域雑誌、漁業者自身が撮った陸上自衛隊^{ちゅうとんち}駐屯地の外観写真などがありました。何より喜ばれたのは、カップラーメンと露文タイプライターだったそうです。モスクワから遠く離れた北方領土に駐屯する警備隊には食料や装備品が十分には支給されていなかったことがわかります。

ところが、ソ連崩壊後の2005（平成17）年7-8月、ロシア領になっていたサハリン州と友好道州関係を結んでいた北海道の高橋はるみ知事（現・参議院議員）に同行して北方領土を管轄するサハリン州を訪れると、州都ウジノサハリンスク（日本名・豊原）は、明るい街並みが連なっていました。因みに、高橋知事にサハリン州が用意した専用車は、日本の駐車場証明が付いている中古のトヨタ車で、市内を走っている車の大半は日本車でした。

翌2006（平成18）年7月、私は「平成18年北方領土^{ぼさん}墓参（第2班）」に同行して^{しこたんとう}色丹島と^{はぼまい}歯舞群島の^{しぼつとう}志発島を訪れました。さらに、2008（平成20）年5-6月には「平成20年度第2回北方四島交流訪問（ビザなし交流）」で^{えとろふとう}択捉島のクリリスク（日本名・^{しやな}紗那）でロシア人の家に泊まらせてもらい、帰りには^{くなしりとう}国後島の海岸に立ち寄ってきました。

^{しこたん}色丹・^{はぼまい}歯舞で戦前、戦後に亡くなった日本人の墓地を草原の中で探すのは大変でしたが、何とか見つけて近づくとその多くは^{きれい}綺麗に保存されていました。ロシアの沿岸警備隊員たち

が大事に清掃し、維持してくれているという話でした。一方、択捉島^{えとろふとう}では、道路はほとんど

舗装^{ほそう}されていませんでしたが、木造のスーパーマーケットの中は、16年前のモスクワとは全く違い、多くの物資や食料であふれていました。ただ、そこを走っている車のほとんどは日本製のランドクルーザーでした。

交流会で北海道から訪れた北方領土の旧島民が「北方領土は日本の固有の領土であり、私たちが故郷を自由に訪問できるようにしてほしい」と話すと、ロシア側住民は「私たちは戦後60年以上住んでおり、ここにいる子どもたちで4世代目だ。私たちはロシア大陸に戻る所はない。この島は私たちの故郷だ」と答えました。この時期、モスクワ政府はクリル諸島^{しよとう}

(千島列島南部^{ちしまれつとう}と北方領土)に5年間で900億円以上も投資しており、各島に飛行場や船着き場、漁獲品加工工場などの基盤整備が着々と進んでいました。その後も4島におけるロシア軍の整備拡充は急ピッチで進んでいます。

ウクライナ侵攻に対する西側諸国の制裁措置でも対象になっているサハリン1・2の石油、天然ガス採掘・輸出^{さいくつ}による外貨収入が入るようになり、北方領土を管轄^{かんかつ}するサハリン州が、極東^{きょくとう}の貧しい離島からロシア全土で経済的に一番豊かな地域になっているのを目の当たりにしました。

こうした状況もあり、占拠から77年がたった現在、ロシアの政治体制に大きな変更でもない限り、返還はかなり難しい状況かもしれません。

根室市^{のきつぷみさき}の納沙布岬の土産物屋には時折、日本の千円札などを持ったロシア兵が訪れ、缶ビールを買っていくといいます。旅券を持たずに海岸から上陸した不法入国ですが、根室市のある市民は「根室海峡で演習をしているロシア兵だ。日本のビールがおいしいので買って帰り、基地で飲むという話を聞いた」と話していました。

日露間の平和条約交渉ではここ数年、4島における共同経済活動などが話し合われてきましたが、プーチン政権は領土の割譲禁止^{かつじょう}を含む憲法改正をするなどし、「日露間に領土問題は存在しない」との立場を崩していません。

択捉島^{ひとかつぶわん}の単冠湾^{りゅうひょう}は、流水が来る冬季にも凍結しない良港であり、1941(昭和16)年12月の真珠湾攻撃^{しんじゆわんこうげき}の際の大日本帝国海軍連合艦隊^{かんたい}の発進基地にも使われました。それだけに、冬季は氷に閉ざされる極東ロシア艦隊にとって、日本固有の領土である北方4島は絶対に手

放したくない自国領土なのでしょう。

また、日本列島周辺の地図を南北逆さになるように 180 度回転して見てみてください。ロシア沿海州のウラジオストクなどから見れば、北海道をはじめとした日本列島は太平洋に出る航路を見事に塞いでいるのがすぐにわかります。サハリンと北海道の間の宗谷海峡そうやかいきょうと北海道と本州の間の津軽海峡つがるかいきょうは、日本の領海ではない部分があり、外国の艦船かんせんが自由に通れる国際海峡だとは言え、海上自衛隊が封鎖ふうさする気になれば沿海州のロシア極東艦隊は太平洋に出ることができなくなります。それだけに、冒頭紹介したミロノフ氏の発言はロシア国民の本音かもしれません。

ウクライナ侵攻をめぐり、日本は主要 7 カ国 (G7) の一員としてロシアに厳しい制裁を科しています。これに対し、ロシアは日本を非友好国に指定し、日露平和条約交渉の中断を通告してきました。こうした中で、北方領土の返還交渉と北海道各地で築かれてきた日露交流は振り出しに戻っています。

ウクライナでの戦争がどういう形で終わり、その後ロシアと、日本を含む西側諸国との関係がどうなるかはわかりません。旧ソ連・ロシア専門の元外務省国際情報局分析第一課主任分析官で作家の佐藤優まさる氏は 4 月 10 日付『産経新聞』の「世界裏舞台」で、「ロシアは急速に別世界になりつつある」と指摘しています。

このコラムの連載はコロナで様変わりする近い将来の世界の中での日本の在り方を展望するものですが、ロシア軍のウクライナ侵攻が加わったことで、戦後の日露関係、極東における日本の在り方も含めて展望しないわけにはいかなくなりました。先の大戦後最大、いや、2700 年に迫る日本の歴史において最も大きな転換点であるといえるかもしれません。